Medical and Pharmaceutical Society for WAKAN-YAKU

P－16

冷え症に対する当帰四逆加呉茱萸生姜湯の効果と自律神経活動との関連

富山医科薬科大学　和漢薬研究所　漢方診断学部門[1]，同　医学部　和漢診療学講座[2]
○柴原直利[1]，喜多敏明[1]，伊藤　隆[1]，嶋田　豊[2]，後藤博三[2]，寺澤捷年[2]

【目的】自覚的な四肢冷感は，西洋医学的には治療の対象となることは少ないが，漢方医学においては治療方剤選択の上で重要な症候であり，その治療においては各種方剤が使用されている。特に当帰四逆加呉茱萸生姜湯は，長期にわたる四肢を主とする寒冷症状に対して用いる方剤である。そこで本研究では，自覚的四肢冷感に対する当帰四逆加呉茱萸生姜湯の治療効果を検討し，自律神経活動との関連を解析することを目的とした。

【対象および方法】自覚的四肢冷感を有する健常女性20名を対象とした。被験者には当帰四逆加呉茱萸生姜湯エキス顆粒7.5gを毎食前に服用するように指示し，２週間後に自覚症状により有効・無効の２群に分類した。投与前及び投与２週間後において，皮膚表面温度（手指・足趾・前胸部，多点温度計），指尖部皮膚血流量（右手第2指掌側指尖中央部・レーザードップラー血流計），R-R間隔，血圧（トノメトリ式血圧計）を測定し，R-R 間隔・収縮期血圧についてスペクトル解析を施行した。また，冷風刺激を用いた寒冷負荷を施行し，寒冷に対する自律神経応答の変化を検討した。

【結果】有効群については，手指・足趾の皮膚表面温度及び指尖部皮膚血流量は有意に増加し，収縮期血圧のスペクトル解析において低周波数成分が有意に減少した。無効群については検討した全ての項目において有意な変化は得られなかった。また，投与前の有効・無効群間の比較において，有意差を示したものはなかった。冷風負荷試験に対する皮膚血流量の反応については，有効群の投与後は投与前に比較して明らかに負荷中及び負荷後の皮膚血流量が増加していた。

【考察】今回の検討において，有効群では本方剤投与により手指，足趾の表面温度が上昇し，また，皮膚血流量が増加していた。心拍及び収縮期血圧のスペクトル解析においては，副交感神経系の指標であるR-R 間隔高周波数成分には変化はみられなかったが，交感神経系の指標である収縮期血圧低周波数成分については有意な低下を示した。また，冷風負荷試験に対する反応は，有効群の投与後では負荷中及び負荷後の皮膚血流量が増加していた。このことは，本方剤の作用機序には交感神経系が関与し，その治療効果には寒冷に対する交感神経応答の変化が関与していることを示唆するものである。

NII-Electronic Library Service